

優秀賞

梅檀とおもてなし

引間 展子 福島県いわき市 七十二歳

おもてなし、そのてらいのない心が、ふいに伝わってきて、これもまた流行言葉の癒しを、胸の内におのずと満たしてくれるとき、というのは、歳を重ねてきたなかでも、そう多くはないような気がする。

それは昨年、秋の夕暮れ時だった。散歩の途中、古い屋敷の庭に実をつけて聳え立つ大樹が目についた。その名を、庭にいた老夫妻に、垣根越しに尋ねてみた。「梅檀の実だよ。樹齢は百年以上だね。」夫妻が歩み寄ってきて、問わず語りに話してくれた。若葉のなかからのウグイスの初鳴き、薄紫の花の香り、手入れや時々の観察のことごと。大樹の姿の移ろいが、その下での近隣の人の集いの折々でもあるという。「ちよつと待ってね。枝を切つてあげるから」と、物置から高枝鋏を持ってきて、枝を選んで譲ってくれた。

わが家に戻つて、房になつて垂れ、黄緑の実の愛らしく踊っている枝を、一番気に入っている素朴な益子焼の壺に活けた。

房になつた実の一粒、一粒を眺める。通りがかりの私への梅檀を介した夫妻のなにげない応対を思い返す。おもてなし。その温もりが少しづつ膨らんでくる。ご夫妻の重ねてきた変わらぬ年輪や人となりに思いをはせる。ことわざにある「梅檀は双葉より芳し」か。

あの別れ際、「またきてね」とご夫妻。この春、再び大樹の下でお会いした。優しさのにじんだ話しぶり。ほのかな花の香りが、それを包み、心も癒されるひと時だった。